

マイスターに聞く
溶接技能向上の
 勘所



「まだ溶接について深く知りたいし、上達もしたい。溶接に関し

ての興味はいまだに尽きない」と語る日立インダストリアルプロダクツの堀川一巳氏。同社製造部製缶課主任としての業務だけでなく、将来を担う製缶員や溶接員の人材育成に忙しい日々を送る。社内外での溶接技術・

溶接への興味は尽きない

983年、日立製作所に入社し、土浦工場製造部製缶課に配属された。84年に第22回技能五輪「電気溶接」の部に出場すると4位、翌85年の第23回大会では

せた堀川氏だったが、浮ついた気持ちはなかった。「大会や社内競技会などで好成績を収めたが、当時はこれくらいできて当たり前だ」と思っていた。周囲の

た。「溶接は電流や電圧のほんのわずかな違いやトーチ角度、ガス流量などの諸条件が変化するだけで完成品の出来栄えが変わってくる。これが難しさである。

指導は厳しすぎると言われた」という。

また、訓練後には、各自に日誌を書かせるなどしてその日に学んだことや反省点、課題などを思い返す作業も

が、同じように教えても選手によって成績が異なるなど指導者として教えること、伝えることの難しさを学んだ時期でもあった。近年は実技指導を中堅社員

行った。自身が描いたに任せ、自身は技術的にアドバースに徹する体的に表現することで、というスタイルを確立理想の溶接を思い描かさせている。

探究心なければ進歩なし

秋の第1回日本溶接協会マイスター（JWE Sマイスター）に認定された。

2位に入賞。87年に開催された第33回全国溶接技術競技会（被覆アーク溶接の部）では最天才肌と呼ばれた青

り、魅力でもある」
27歳から29歳までは
技能五輪の指導員とし
て社内の若手を厳しく

堀川氏は、日立工業

優秀賞に輝いた。

年は20代前半から火力鍛え上げた。堀川氏に

いうものだ。

技能伝承に努めていき

堀川一巳氏(日立インダストリアルプロダクツ)

このころまだ溶接を始めて実質6年ほど。若くして才能を開花さ

や原子力、冷凍機など よれば「選手に要求する様々なプラントの現地課題もレベルが高容でさうに腕を磨く、先輩からも堀川の

一方で堀川氏自身も、情熱は、冷めることがない。溶接への